

## バリの風土と家系についての考察（Ⅲ）

森 宗 平  
松 原 正 道

### はじめに

本研究紀要第34号で、オカ・シラグナダ Oka・Siragunadha氏から聞いた、第二次大戦の際、屋敷であるプリ・アニヤール Puri Anyar へ日本兵が来て、そのために、収穫した米の運搬に支障を来したと言うこと、そして、当時、17才だった姉を日本兵の目にふれさせないようにするため、家人が苦勞したと言う話を記した。

南海の小島バリ（島）に日本は軍政を施いていたのだ。

この一事でもわかるように、「最後の楽園」と言われるバリ（島）といえども、その時々政治、国際情勢に超然として「楽園」を保っているわけには行かなかったのである。

本稿執筆中、隅々、2002年10月13日(日)、バリ（島）の中でも最も賑わっているクタ・ビーチのレギャン通りにあるディスコ店の「サリ・クラブ」で爆弾テロ事件が発生し、200人近い人命が失われたと言う報道がなされた。

インドネシアでは治安が良いとされ、多くの日本人が訪れる同地であるために大きなショックを受けた。

ニューヨークの貿易センター・ビル事件に関わった組織アル・カイダに関連する者の犯行であったと伝えられている。

そこで、本稿では、そうしたバリ（島）およびその周辺の地域、就中、インドネシア共和国の主要部をなすジャワ、スマトラ周辺地域とバリ（島）との関わりが大きいと考えられるので、特に、これら二つの地域について、その歴史的背景およびバリ（島）との関係を考察して行きたいと考えている。

特に、今回は、歴史的背景のうちでも、インドネシア地域がイスラム化される以前の時代までを検討の対象として行きたいと思っている。

なお、「バラモン教が民間信仰を包含して新たにヒンドゥー教が勃興したが、これを含めて

バラモン教ということもある」<sup>(1)</sup>と言われ、両者の関わりが強いということから、本稿では、ヒンドゥー（バラモン）教と表示する。

## 1

今日、圧倒的にイスラム教徒の多いインドネシアにおいて、ヒンドゥー（バラモン）教徒が多数を占めるバリ（島）は特異な存在と言える。<sup>(2)</sup>歴史的には、ヒンドゥー（バラモン）教はイスラム教に対してその古さを誇ってはいるが。

バリ（島）が、ヒンドゥー（バラモン）教の世界と言うことは、インドに興ったヒンドゥー（バラモン）教が、周辺の地域に伝播し、東に向かいバリ（島）に至る過程で、他の地域、特に、今日のインドネシアの主要部をなすジャワ、スマトラ等の地域においても当然の如くその影響があったと言うことを意味している。そして、それは仏教についても言えることである。

インド文化の受容について、それは土着文化との関連において意識的になされており、選択的・主体的受容の結果、仏教とヒンドゥー（バラモン）教とが混淆されたような本来のインドの文化にはなかった信仰形体を生み、インド社会を特色づけているカースト制を殆ど取り入れてなかったと言われるのである。<sup>(3)</sup>

だが、今日、バリ（島）に厳然として存在しているカースト制度（カースタ）を認めないわけにはいかない。

カースト制度が現在バリ（島）でどのように機能しているかについて部外者には仲々分かりにくいところだが、少なくとも、バラモン（ブラーフマ）、クシャトリア（サトリア）、ヴァイシャ、スードラと言った、分化された身分階層についての呼称が残っており、これが日常的に使われていることを認めないわけにはゆかないだろう。

インド文化の選択的・主体的受容は、信仰、宗教、身分制度のみならず、人々の生活の面でも多岐にわたっており、中でも、人間にとって最もと言ってもよい基本的問題である言葉についてもそれが言えるようだ。

15世紀に至る古い時代のジャワ語はサンスクリットを始めインドの言葉を色濃く反映しながらも、ジャワにおける各民族の言語を自由に表現しうる文字として作られたと言うのである。<sup>(4)</sup>

そして、言葉を媒介として成り立っている文学について、就中、ジャワ文学については、初期から15世紀に至るイスラム教渡来以前のそれについて、インド・ジャワ（古代ジャワ）時代と言われているということからも同様のことが言える。<sup>(5)</sup>

そして、インド文化受容の典型的な例として、今日、中部ジャワの要衝の地（ジ）ヨクジ

ジャカルタに近いプランバナン平原にヒンドゥー（バラモン）教のララ（ロロ）・ジョングランを、そして、クドゥ平原には仏跡ポロブドゥールを見ることが出来る。



1. ロロ（ララ）・ジョングラン



2. ロロ（ララ）・ジョングラン



3. ポロブドゥール

このように、イスラム教の国インドネシアにおいても、歴史的には、ヒンドゥー（バラモン）教、仏教に代表されるインド文化の影響を受け、今日でもそれを色濃く残していると言うことである。

このことは、先に受容したヒンドゥー（バラモン）教や仏教等のインド文化が、後発のイスラム教に取って代わられはしたが、ひと度受容されたインド文化はインドネシアの文化に溶けこみ、その後も社会の隅々まで根強く残り、イスラム教が入って来たとは言え、完全に払拭されたわけではないと言うことを意味している。その点でも、インド

ネシアにおいては、インド文化が、選択的・主体的に受け入れられていたと言えるのだろう。

アフガニスタンのバーミヤンにおける仏教遺跡の石像が、これまでの歴史の中でも、また、近年、同国を支配していたタリバーンによって破壊された如く、イスラム教には、他宗教に対する不寛容な面が見られないでもない側面を感じさせられる。

だが、インドネシアにおいては、ボロブドゥールやララ（ロロ）・ジョングランに見られるように、それらの建造物は意図的に破壊された形跡も見られずに、その偉容を今日に伝えている。

このことは、この地域における異文化受容の在り方を示していると言えるのだろう。

「インド植民地の建設は、紀元1世紀のものだが、インド文献中には、東南アジアに関する記事が早くも紀元前6世紀にはみえはじめている」<sup>(6)</sup>とされている。

インドネシア地方に定住していた民族のうち海洋に乗り出し、北は台湾、南はオーストラリア、東はイースター島、西はマダガスカルへと言うように広範な地域にわたって移動、海岸によって隔絶され、孤立した生活条件のもと長年にわたり経済的、社会的、文化的偏差を生じ、やがて、無数の種族を醸出したものと考えられている。<sup>(7)</sup>

そうした中で、インドネシアについては、インドネシアの伝統を強く残し西部ジャワに定住した「スング族」、中部ジャワから東部ジャワへも伸出したヒンドゥー（バラモン）文化の影響を強く、かつ、長く受けた「ジャワ族」、そして、東部ジャワ、特に、マドゥラ島に定住しヒンドゥー（バラモン）教の影響を比較的受けなかった「マドゥラ族」に大別されていると言う。<sup>(8)</sup>

そして、西暦紀元前インドからヒンドゥー（バラモン）人がインドネシア地域に渡来し、中でもジャワは南海諸島で、最も早く開け、インドとは紀元前後から交渉があり、インド人はこれを「ヤヴァドゥヴィーバ（大麦の国）」と呼んでいたと言われるのである。<sup>(9)</sup>

「インド人の造船技術、航海術の発達、異民族との接触を抑止していたバラモン教に代わって仏教の自由な観念の普及が東南アジアとインドとの間の海上交通を1・2世紀を境にして急増した。」<sup>(10)</sup>と言われるのである。

その一方では、「インドネシア系民族において造船・航海の技術的発達が著しく、これが通商活動や異質文化の受容に資したにちがいない」<sup>(11)</sup>と言う意見に見られる異なった見方もある。

これら両方の意見からすれば、相方向からの交流が、インドネシアの地域にインドの文化をもたらしたと考えてよいのだろう。

「海のシルクロード」としての、アフリカからアラビア海、インド洋、マラッカ海峡を経て東南アジアへ至るルートは、古来、多くの人々が往来し東西交渉のための要路として使われて来たのである。



4. クラッティン・ビーチ（クランピタン，バリ）より見たインド洋



5. マラッカ



## 6. マラッカ

今日でも、石油を中東諸国に依存している我が国にとって、この交通路は重要な役割を果している。

そして、このルートに位置しているスマトラ、ジャワ等のインドネシアについて、インドと中国（漢朝）との間の海上交通が、ジャワを不可欠な補給地としているため、インド商人や中国商人等の来航は至極当然のことであり、ジャワ周辺の地は、西暦紀元前後には既に、ヨーロッパにも「米の国」、「黄金の国」として知られていた。<sup>(12)</sup>

こうして、「この地域に來航した人々が各地に居留し、この居留地が、植民地や小王国に発達していったとみられる」<sup>(13)</sup>といわれる一方では、「インド化国家の出現をインド人による植民国家の建設、あるいはインド文化の東南アジア征服と考えるのは誤りである。多くの国家の中には、インド系の君主が支配した場合もあったであろうが、一般的には土着の諸民族の国家であった」<sup>(14)</sup>とも言われるのである。

相方の見方に、それぞれ妥当性を感じさせられるが、後者の意見に傾いた社会相だったのではなかろうかと言うのが常識的な考え方でないかと言えそうである。

それまでの政治的混乱を収めて4世紀初頭に興り、5世紀末頃まで続いたグプタ朝がインドを支配するようになると、統一・強化されたインド文化に土着の君主達は惹かれ、それを自らの権力強化に利用したと考えられている。<sup>(15)</sup>

そして、先進のインド文化を自らの主体性をもって受容し、これを活用して、民族向上に資したのだと言えるだろう。

インドからの渡来人は始め西部ジャワに、次いで、中部に住むようになり、5世紀、西部に、タルマ・ナガラと言う国の存在が知られる。7・8世紀頃には、中部ジャワにシヴァ派を信奉する王朝が栄えたが、8世紀半ば以後はシャイレンドラ朝が中部ジャワを支配するようになった。<sup>(16)</sup>

「5世紀当時のタルマ国の社会構造を窺ってみると、『多数の外道』(スンダ人)と『多数のバラモン人』(ヒンズー人)とによって構成せられ、仏教徒は、『ほとんど皆無』だったようである<sup>(17)</sup>であり、ヒンドゥー(バラモン)人と土着のスンダ人との関係は支配階級と被支配階級と言う社会構造を形成はしたが、両者の関係はそう厳しいものではなかったようだ。<sup>(18)</sup>

多くの歴史に見られる如く、人々の交流は生活に必要な物資を手に入れる等と言う経済的活動から始まり、後追いつる形で政治権力がそこに加わり、両者が一体化して民族なり国家の事業となるのが普通である。そして、時に、そこに信仰とか宗教が結びつき、事を更に大きくして歴史上の大事件へと発展することもある。

商人達は、富を求めて各地に出向き、時に平和的、時に暴力をもって商業活動を行い、その中には、代々その地に定住し、そこを活動の拠点とする者も珍しくない。華僑、ユダヤ人、そして、インド商人等々。

このことは、東南アジアにおいても例外ではなく、この地域におけるインド人の通商活動は紀元1ないしは3世紀の間に活発化した。そして、通商活動に便のよい中心地に建設されていた商人の居留地は次第に富み、結束を強めていき、やがて、紀元4・5世紀には、それらが他から独立したインドの文化的、宗教的、また、美術的中心地へと発展していったと言う。<sup>(19)</sup>

インド商人は、今日でも商売上手でその名が通っており、世界の各地にインド人街を見ることが出来るし、我々が海外へ出掛けた場合でも、日本食レストランはなくとも、インド料理のそれは中国料理のレストランと並んでよく目にするところである。

先述の如く、西暦2世紀に興り4・5世紀まで続いたと見られるヒンドゥー(バラモン)教を信奉していたタルマ・ナガラをもって、インドネシアの最初の王国と考えられている。<sup>(20)</sup>

そして、土着のスンダ人に対して外来のヒンドゥー(バラモン)人は支配階級として存在するが、両者の関係はそう厳しいものではなく、「土着のスンダ人に対する外来のヒンズー人の支配機構であり、その頂上に立つものが、ヒンズー国王であったことが判る。そして、この場合、ヒンズー支配は、基底におけるスンダ社会そのものに触れず、(中略)『上部構造』として被されたに過ぎず、従ってヒンズー支配は、少なくとも西部ジャワ(スンダ社会)に対して、さまでラジカルな影響をもたなかったのである」<sup>(21)</sup>と言われるのである。

4世紀に興りインドの大半を支配したグプタ朝ではヒンドゥー（バラモン）教が復活、シヴァ、ヴィシュヌ両神が尊崇されるようになった。<sup>(22)</sup>

このことは、周辺の地域にも影響を与えないではおかなかったと言うことを意味するので、タルマ taruma ナガラ（王国）を始めとするインドネシアの各地域にもそのことは反映されていることだろう。

そして、東南アジアの君主達はインドの制度や宗教を取り入れることで自らの立場を高めるとともに、国家の整備に役立てたと言うのである。<sup>(23)</sup>

## 2

建国年代が明らかでないが、東南アジアでの大乘仏教の受容が最も早い年代を示していると考えられている、7世紀の碑文が見られると言うシュリーヴィジャヤ Śrivijaya 王国はスマトラの東南部に拠りパレンバンを都として、7世紀後半に急速に勃興した。

同世紀末、ジャンビを中心としたマラーユ Malayu 王国を併合し、次いで、マラッカ海峡を越えて海岸のマレー半島のケダーを占拠、パレンバンと並び王国の重要な拠点とした。

一方では、スンダ海峡を越えてジャワにもその勢力を伸ばしたり、8世紀には、早くからインド文化を受容し、後世、山田長政が王になるリゴールをもその支配下に置いた。

そして、同王国はインド文化を盛んに受け入れ、東南アジアにおけるインド文化受容の一大拠点となった。

7世紀後半の唐の仏教僧義浄がシュリーヴィジャヤに立ち寄り、6ヶ月間サンスクリットを学んだ後インドへ留学、その後も同国へ戻り仏典の漢訳や筆写に従事した。そのため、唐の仏僧の中にはこの国に立ち寄ってからインドへ留学したり、中には、インドへ行かずにシュリーヴィジャヤで勉強する者も多かったと言うことである。<sup>(24)</sup>

このことは、シュリーヴィジャヤのあったスマトラを始めとするインドネシアの地域においてインドや中国との交流が如何に多かったかと言うことと、そうして得たインド文化の水準の高さを物語っていると同時に、これを支えているこの地域の文化水準の高さについても言えることでもある。

そして、それは併せて中国との交流も盛んであったと言うことをも物語っている。

そうした背景もあってか、今日でも、バリ（島）においてさえ、中国系の人は多く、漢字の名前を持っている者もいる。

この時代、シュリーヴィジャヤの唐に対する朝貢は7世紀後半から8世紀半ばに至る間に盛んに行われたが、その後は途絶え、8世紀後半から9世紀後半に至る時代に、ジャワのシャイレンドラ王朝が中国（唐）との交流を活発化して行った。<sup>(25)</sup>



8世紀、ジャワに興り、後に、スマトラへ進出しシュリーヴィジャヤを支配下に収め、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王朝を形成することになる、サンクスリットで「山の王」、  
「山の支配者」と言う意味を持つと言うシャイレンドラ Śailendra 王朝が誕生する。

同王朝は、ジャワのそれまでの信仰だったヒンドゥー（バラモン）教に代わって大乘仏教を信奉し、仏教の保護・発展に力を尽くした。<sup>(26)</sup>

そして、同王国時代の仏教建築として、何と言っても中部アジアのクドゥー平原に8世紀から9世紀にかけて建設されたボロドブドゥールのそれが有名であるが、8世紀後半、バナ  
ンカン王によってプランバン平原に建立されたチャンディ（祠の意）・カラサンも同王朝  
時代のものとして、今日においてもその名が知られている。

9世紀半ば、シャイレンドラ朝の王族バーラプトラ Bālaputra はシュリーヴィジャヤ王国  
の王女を母としていたが、自らの姉妹の夫である国王と争い、これに敗れると、母の出身地  
であるシュリーヴィジャヤへ行き、その地を統治することになった。

これが、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王朝の初代の君主であると考えられている。<sup>(27)</sup>

こうして、シャイレンドラ王朝によって支配されるようになったシュリーヴィジャヤ王国  
は、再び、海を舞台にして通商活動を活発化させ、10世紀を迎えると、その最盛の時代を示  
すようになった。

バーラプトラ王は、熱心な仏教徒だったため、インドのナーランダに仏寺を建て等、イ  
ンドとの関わりを強めた。そして、こうしたシュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国とイ  
ンドとの関係は11世紀に至るまで続いたのである。

9世紀半ば頃から中部ジャワにヒンドゥー（バラモン）教を信奉する有力者が再び台頭す  
ると、同地におけるシャイレンドラ王朝の勢力は相対的に衰退する。そして、その主力をス  
マトラに移し、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王朝を確立させて行き、同地に一大勢  
力を持ち、繁栄の時代をもたらした。反面、ジャワの領地を失う。

中国の唐王朝、西アジアに君臨するアッバース朝を結ぶ海上通商路に位置する東南アジア。  
中でも、今日でもそうであるが、マラッカ海峡をはさむマレー半島、そして、スマトラを始  
めとするインドネシア周辺地域の通商・交易上の価値は大変大きなものである。

それ故、パレンバンを都とし、対岸のケダーをも拠点として保持していたシュリーヴィジ  
ジャヤ・シャイレンドラ王国の占める相対的地位は高く、東西交通の発達に大きな役割を果た  
した。中でも、東西文化のインドネシア周辺地域への受容には多大な貢献をなした。

11世紀前半、王族出身のダルマキールティ Darmakirti は、インドに渡り、ブッダガヤー  
でシュリーラトナについて仏教を学ぶが、帰国後は、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ  
王国の仏教発展に大きく貢献した。

また、インド僧で、後に、チベットへ入って、同地の仏教の改革に多大な貢献をなしたア

ティーシャ Atisa はグルマキールティに師事するために、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国へ留学して来たと言われている。<sup>(28)</sup>

この一事をもってしても、同王国が如何に高い文化を持っていたかと言うことが知れるし、インドネシア周辺地域が、この時代になると、単に、一方的なインド文化受容の立場にあったのではなく、相方が互いに影響し合う関係にあったと言うことを物語っている。

そして、当時のパレンバンには、サラセン人を始め諸国の商人が交易のために同地を訪れ交易に従事し、活況を呈していたと言う。<sup>(29)</sup>

これまでのヒンドゥー（バラモン）教や仏教徒同様に、インドネシア周辺を始めとする東南アジア地域にイスラム教の浸透が始まったと言うことと、イスラム国インドネシアの萌芽が見えることとなったと言うことである。

11世紀になると、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国は、インドのチョーラやジャワの勢力の侵攻を受けるようになり国力を衰えさせて行った。

そして、同世紀末になると、国の中心をスマトラのジャンビに移したため、国内は政治的にその影響力を低下させて行った。

このため、都だったパレンバンは中国人が占拠し、彼らは、ここを旧港と称し、海賊行為とも言うべき武力的商業の根拠地としてしまった。<sup>(30)</sup>

今日、マラッカ海峡周辺の海域に海賊行為を働く者がおり、日本の船舶も被害を受けることがあると言う。そのため、それを阻止するための国際会議が開催されているとのことであるが、その素地は既にこの頃からあったと言えるのかも知れない。

つまり、彼らは、代々、海賊行為を業いとしてきたのだと言える。

「マジャパヒト王国時代、西部ジャワに拠っていたパジャジャラン国では15世紀に至っても、農耕は行われず、海賊を生業にしていた」<sup>(31)</sup>と言われるのである。

8世紀、サンジャヤ Sanjaya 王（在位732-760頃）により興され、中部ジャワのケドウ北部を中心にした版図を持ち、シヴァ神を信奉したヒンドゥー（バラモン）王朝のマタラーム Mataram 王国は、同王の時、シャイレンドラ王朝との衝突を意味する東ジャワの征服を行い、やがて、バリ（島）やピマ島、更には、スマトラのメユラ地方からマレー半島を経てインドシナに至り、中国の唐とも戦っている。

同王朝は、9人の王が登場し、シャイレンドラ王朝が勢力をスマトラに移すと、その故地を領有し、ジャワ一帯に勢力を有するようになった。そして、その領地の各地に多くのシヴァ神寺院を建設した。

しかし、10世紀、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国が西ジャワを拠点として東進の勢いを示すようになって来ると、マタラーム王国は、東ジャワのシンガサリへ後退を余儀なくされた。

クダシャの孫と言われ、始めはマタラーム王国のワワ王に仕え、その宰相だったムプ・シンドMpoe Sindok (? - 947) は、927年か8年に王位について新たにクディリ Kediri 王朝を創設したが、彼は、自らをマタラーム公と卑称していた。

都を東ジャワのスラバヤに移したため、この地方が始めてジャワの政治、経済、そして、文化の中心地となった。

彼は版図の拡大に務め、スラバヤを中心に、バスルアン、クディリをその支配下に収め、一時期、バリ(島)へも征服の手を伸ばした。

ダルマワンサ Dharmavansa 王(在位991?-1007)の時にも、クディリ王国はバリ(島)にその勢力を伸ばし、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国との間に確執をもたらした。宿敵シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国との戦いにおいて、一時期、ダルマワンサ王率いるクディリ王国は優位に立ったが、その後は逆襲を受け劣勢となり、王は戦死をする。

この両国の間の戦いの中で、クディリ王の後継者となる若きエルランガ(アイルランガ) E (Ai) rlangga (在位1019-42) は身をもってその難を逃れた。

バリ(島)の王とジャワの王女との間に生まれ、ダルマワンサ王の王女と結婚して王国の地方長官をしていたエルランガは、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国との戦いの中で王が死んだ後、苦難の年月を経て即位する。

エルランガ王は、その後も、敵対する諸侯との間の戦いに従事し、1037年に至り、始めて東ジャワの統一に成功した。

王は都をパレンバンに置き、裁判の公正を計ったり、治水工事に力を尽くす等内政の充実に関心した。また、文学を尊重してジャワ文学の隆盛をもたらした。

だが、王は、死の数年前、2人の子供に王国を分け与えて退位し、しばらくの間は実権を持ち続けていたが、その後は、世俗を離れ、宗教的指導者ムプ・パラダの導きに従い隠遁生活を送るために僧院に入り、余生をヴィシュヌ神への奉仕にささげた。

エルランガ王の退位に従い、その二人の子供達によって二分されて継がれたジャンガラ Jangala 王国とパンジャル Panjalu 国は、やがて、ダハに都を置いた後者が前者を併合、更に、群島の東部地方に勢力を伸ばしはしたが、ケルタジャヤ Kertajaya 王(在位1216-22)の時代、トウマペルの藩侯ケン・アロに王が殺され、クディリ王国は滅びる。

ムプ・シンド王は熱心な仏教徒だったが、その後の王統は、エルランガ王に見られる如く、ヴィシュヌ神を信奉したように、ヒンドゥー(バラモン)教へと宗旨替えをしている。

ダルマワンサ王時代、王はジャワ語を公用語とする等土着文化を尊重し、その充実を計ったため、この時代、「マハバラータ」のジャワ語訳がなされたようにジャワ文学の隆盛が見られた。

13世紀になると、東ジャワに都の名に因んで呼ばれるシンガサリ王国が誕生する。

同国は、トゥマベル出身でクディリ王国を滅ぼしたケン・アロ Ken Arok (? -127) が創始したものである。

農家の生まれの彼は、少年時代に非行を重ねたが、人に取り入る才能を持っていたため、バラモンのローヴェ家の養子に入り、義父の伝手でトゥマベルの領主の家臣となるが、主君を殺し、その妻を奪い自らが領主となる。妻との間には合意が成り立っていたようだ。<sup>(32)</sup>

クドラジャ（後のシンガサリ）に住み、1222年、クディリ王国より独立を宣言、国王を襲撃して同国王を滅ぼしたが、ケン・アロ王は、在位6年で、自らも養子のアヌサパチの従僕の手で暗殺されてしまった。

シンガサリ王国の最盛期は、5代のクルタナガラ Krtanagara 王（在位1268-92）の時、彼は王太子として、1254年以来国政の一部を担ってはいたが、即位後は独裁政治を行うようになった。

王は、外征を好み、国威発揚を計り、ジャワ全島はもとより、マドゥラ島、バリ（島）を併合、南ボルネオ、スマトラ、マレー半島の一部にわたる大領土を支配した。

だが、元の世祖（フビライ）が入朝を度々要求して来たのに対し、これを拒否したため、元軍によるジャワ侵攻の口実を作ってしまった。ところが、王は、1292年、元軍がジャワに進攻（1293）する前に、女婿でクディリの藩王ジャヤカトゥアンの反乱に会い、これに殺されてしまい、シンガサリ王国は滅亡する。

同王国時代には、仏教が再び栄え、シヴァ信仰とともに両者が並立することとなった。

シンガサリ朝の篡奪者ジャヤカトゥアン Jayakatwang を駆逐し、元軍の手の中で死を迎えさせることになるシンガサリ朝の王子であるラーデン・ヴィジャヤ Raden Vijaya（在位1293-1309）は、即位の後、クリタラーヤサ・ジャヤヴァルダナと称し、シンガサリ朝の旧領を復活して新王朝を建てた。東部ジャワのマジャパヒトに都を置いたため、マジャパヒト王国の名で知られている。

同国王の最盛期は、3代トリブワナ女王の子で、即位後、ラージャサナガラと称した4代ハヤム・ウールーク Hayam Wuruk（1334-89 在1350-）の時代であった。

王は、母女王時代から仕え、名宰相の誉れ高いガジャ・マダ Gaja Mada を引き続き重用、王朝の最盛期はを現出し、その領域は、西ジャワを除く現インドネシア共和国の殆ど全領土と、ボルネオおよびマレー半島の一部にわたっていたと言われている。<sup>(33)</sup>

国内は平和が続き、商業は繁栄し、王家の財政も豊かになり、国勢はいやがうえにも上がって行った。文化面でも顕著な発展を生み、中でも文学についてはジャワ文学が勃興し、宗教的建造物も数多く造営された。

ハヤム・ウールーク王の下で、名宰相の名をほしいままにしたガジャ・マダ (? -1364) は、2代ジャヤナガラ Jayanagara 王の危機を救ったことから、將軍職から一躍知事に抜擢

され、次いで、1331年のサデン人の叛乱に際し、これの鎮定のために功績をあげたことで宰相となった。3代トリブワナ女王（シャヤヴィシユヌヴァルドハニ）およびその子ハヤム・ウールーク王の下で国政を司ること30年におよび、その手腕を如何んなく発揮した。

この間、ジャワおよびその周辺の地域を征服、王の版図拡大に多大なる貢献をなし、南海史上最大なものとした。立法、司法等内政面でも国の充実に力を尽くし国威発揚に貢献した。

しかしながら、その支配地は東ジャワ、マドゥラ島、バリ（島）ぐらいだろうと言う一方の見方もある。<sup>(34)</sup>

そう言われながらも、バリ（島）のカジャ・マダ通りに見られる如く、彼の名に因んだものが現在もインドネシアにあると言うことは、今日に至るも、彼の業績を無視しえない一面があるのだと言えよう。

ガジャ・マダの死、そして、ハヤム・ウールーク王の死によって、マジャパヒト王国にも衰退の兆しが見えはじめ、王位継承の争乱が起る。属国の中から離反するものが相つぎ、海岸地域におけるイスラム化による規律の弛緩、相次ぐ戦乱による領土の荒廃に王国の衰退を促進した。

ジャワの伝承によれば、1478年にはラナヴィジャヤ・ギリンドラヴァルドハナによって都のマジャパヒトが陥し入れられ、同王国は滅亡したと言う。しかし、正確な滅亡年代は不明で、16世紀初め頃と見られている。<sup>(35)</sup>

マジャパヒト王国時代にも、宗教建築物の建造は多く行われ、バタナラン寺、キダル寺等はその代表的なものである。また、ジャワ文学も盛んとなり、ハヤム・ウールーク王時代の宮廷詩人プラパンチャによる王の頌徳詩「ナーガラクルターガマ」は、特に有名で、当時の宮廷生活、政治、宗教等を知るのに役立つと言われている。<sup>(36)</sup>

以上、ジャワ、スマトラを中心に、今日のインドネシア共和国周辺の地域における歴史をマジャパヒト王国に至る時代までを概観し、バリ（島）との関わりについて見て来た。

そこには、歴史の常である民族間の交流による異文化の導入、それは常に、自らの生活に資する文物をもってなされ、時に、為政者によっては、それが自らの地位の向上、あるいは、権威の確立に役立つと言うことでそれを積極的に活用した。それは、宗教についても言えることである。

従って、本稿の舞台である、今日のインドネシア、とりわけ、ジャワ、スマトラ周辺の地域においても同様のことが言える。

時に、ヒンドゥー（バラモン）教、また、時に、仏教と。歴史の中で、宗教の果たす役割は大きく、これはいづこの歴史においても例外はない。

その点で、インドネシア地域においても、その時々々の要請に従いそれを受容、自らの都合に合わせて活用、それが今日のこれらの地域における社会の基盤を形成しているのである。

ひるがえって、歴史の中でのバリ（島）の立場について考えてみるならば、6世紀頃には、中国にもその名が知られ、婆利、婆里等の言葉で紹介されていたと言う。<sup>(37)</sup>

また、ジャワを通じて早くからインド文化に接し、その影響を受けていたと考えられる。

だが、「バリのヒンドゥー文化はその伝来の初期に当たってはジャワを経由してもたらされたものではなく、インドから直接伝えられたと考えられている」<sup>(38)</sup>とも言われるのである。

このことは、インドの人々が、直接、バリ（島）との交渉を持つことに何らかの利益があったと言うことと、先に見た如く、土着の君主達が、インド文化を取り入れることによって自らの政治的地位の向上を計ったと言うことを含めて、インド文化受容のための素地が既にあったと言うことを意味していると言える。

7～9世紀に栄えたジャワのシャイレンドラ王朝の影響力が薄れると、バリ（島）は、今日もその名が残っているペジェンやブドゥルの独立した王の支配下に入った。<sup>(39)</sup>

しかし、8世紀、マタラーム王国のサンジャヤ王の時代、バリ（島）はその支配を受け、再びジャワの影響下に入った。

10世紀初頭には、シュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王朝の東侵に押され、クディリに新王朝を開いたマタラーム王国の宰相だったムプ・シンドが一時期バリ（島）へも征服の手を伸ばした。また、同じく、クディリ王国時代、10～11世紀にかけて、ダルマワンサ王の時にもバリ（島）はその勢力範囲に入ることになった。

こうした、ジャワとの間に関わりを絶えず持って来ていたバリ（島）は、11世紀前半クディリ王国を再興したエルランガ（アイルランガ）王の時、彼が、バリ（島）の君主とクディリ王ダルマワンサの王女との間に生まれた子供であったと言うことで、ジャワとのより密接な関係を持つことになった。

彼は、バリ（島）の支配を継承するとともにシュリーヴィジャヤ・シャイレンドラ王国に敗れ分裂していた国家の再建を目指し、1037年頃、西部を除くジャワの統一をなし遂げる中で、バリ（島）との間の結びつきを強めて行った。

その一つとして、彼は、ジャワ語をバリ（島）の公用語としたと伝えられている。<sup>(40)</sup>

当時、バリ（島）の君主は代が替わり、エルランガ王の弟が支配者になっていた。

バリ（島）の歴史によれば、エルランガの王国は、悪霊の女王であるランダのもたらした悪疫によって危なく滅亡するところであったと言う。そして、この魔女こそ、他ならぬエルランガ王の母親であるジャワの王女だったと言うのである。偉大な王と魔女との間で、展開された熾烈な争いは、伝説「チャロン・アロン」を生み、エルランガ王をバリ（島）の神話的歴史の中の最大の有名人にしたと言われているのである。<sup>(41)</sup>

親子同士の争い、特に、政権をめぐる争いと言う例は歴史の中ではよくあることであり、この場合は、母と息子が争ったと言うことである。そして、それは、ジャワとバリ（島）



### 7. プサキ寺院

との間の確執とも受けとれる。

以上の話は、如何にも現実でありそうなことであるが、「11世紀には、バリ王とジャワの王女との間に生まれたとされるクディリ朝のエルランガ王が一時期バリと東ジャワを統治し、バリ＝ヒンドゥーの総本山であるプサキ寺院が建立されたといわれているが、初期碑文からの推測の域を出ず、14世紀以前のジャワ、バリの歴史については現在も明らかにされていない」<sup>(42)</sup>とも言われているのである。

13世紀末、マジャパヒト王国が東部ジャワに誕生すると、シンガサリ（トゥマペル王朝）下にあったバリ（島）は自由になったが、14世紀中頃、マジャパヒト王国最盛期の4代ハヤム・ウールーク王の時代、名宰相の誉れ高いガジャ・マダが内政、外政に手腕を発揮し、今日のインドネシア全域とマレー半島の一部を服属させると言う広大な地域をその領土とした。そして、その版図拡大の過程の中で、1343年にバリ（島）をも征服、その支配下に入れて行ったのである。

マジャパヒト王国の誕生に際して、シンガサリ（トゥマペル）朝下にあったバリ（島）は、その束縛から解放されたにも関わらず、再び、ジャワの支配下に入れられたと言うことになる。

そして、14世紀、マジャパヒト王国がバリ（島）をその統治下に治めたことによって、バリ文化のジャワ化が進んだと言われるのである。<sup>(43)</sup>

今日、バリ（島）には、その名に因んだガジャ・マダ通りが、州都デンパサールの主要な道路としてあるが、これも、こうした歴史の背景を物語っていると言える。そして、もう一つ、ガジャ・マダ通りに接し、彼の主君の名がつけられたハヤム・ウールーク通りもある。

このことは、バリ（島）にとって、マジャパヒト王国の影響が如何に大きかったかと言うことを物語っていると言える。

バリ（島）人は、マジャパヒト王国に対して何回も抵抗を試みはしたが、その反抗は、歴史



8. ガジャ・マダ通り



9. ハヤム・ウールク通り



にその名が残るような戦いの結果その都度鎮圧されてしまったのである。<sup>(44)</sup>

そして、アリヤ・ダマルやガジャ・マダを始めとした武将達によってバリ（島）は支配されたのである。<sup>(45)</sup>

だが、やがて、ジャワでは、イスラム教徒の影響が強くなり、各地の王族、藩侯達はこれに改宗してスルタンを名乗り、マジャパヒト王国に対する忠誠心が薄らいでいった。

間もなく、それまでの平和的布教から軍事力の伴ったそれにとって代われ、熱狂的なイスラム教徒がマジャパヒト王国に戦いをしかけて来た。こうした外圧や内部抗争の続出によって同王国は弱体化して行き、やがて、崩壊を迎えるのである。

マジャパヒト王国最後の王、プラ・ウィジャヤの死後、王の息子はイスラム教徒の侵略に抗しきれず、最後に残った植民地であるバリ（島）に逃れて来た。

廷臣、祭司、工芸師等の沢山の人々を伴って来島した彼は、グヌン・アグン（山）の麓にあるゲルゲルの南海岸に落ち着き、バリ王、デワ・アグンを名乗った。

この称号は、その後、クルンクンの王（ラジャ）によって代々受け継がれて行くのである。

デワ・アグン王は、バリ（島）を幾つかの公国に分け、それを一族の者や將軍達に治めさせた。しかしながら、彼らは、次第にデワ・アグン王の下から離れて独立して行き、小王国の君主（ラジャ）となる。こうして、バリ（島）は分裂状態となるのである。<sup>(46)</sup>

インドネシア周辺地域に高い文明度を誇ったマジャパヒト王国の流れを汲み、バリ（島）の支配階級として、その上部構造をなした王族、司祭、知識人と言った者達は、当時としては最高の文化水準の持ち主であった。

こうしたジャワ文化の最良の部分がそっくりバリ（島）に移って来たと言うことは、その後のバリ（島）文化形成のうえで決定的なものとなった。<sup>(47)</sup>

ヒンドゥー（バラモン）・ジャワ人のもたらした宗教、哲学、芸術等は旧来のそれを大きく損なわずに、その後のバリ（島）の文化形成に多大な影響を与え、今日に伝えられているのである。

## おわりに

今日、バリ（島）をヒンドゥー（バラモン）教の世界としていると言うことは、少なくとも、ヒンドゥー（バラモン）教、仏教、その後のイスラム教との間に展開された宗教上の抗争の中で、バリ（島）が、ジャワを始めとするインドネシアの諸地域とは違った独自の歴史的経過を経て来たと言うことを物語っている。

それも、同じヒンドゥー（バラモン）教と言えども、寺院の建物に見られるように、インドのそれや、インドネシアにおいても、ジャワにあるララ（ロロ）・ジョングランのそれと比

べ、バリ（島）のものは、その様式が著しく違っている。

このことは、先に見たように、同じインドの文化を受容するにしても、インドネシア的に改良して受け入れられたと言うように、バリ（島）でヒンドゥー（バラモン）教を受け入れるについても、バリ（島）に相応しい受け止め方をしたと言うことになる。

その点では、ジャワやスマトラのようなインドネシアの主要部と同様、バリ（島）も、外来文化を自らの体制の中に取り込み、従来からあるものと混淆させ、より高次のものへと昇華させることが出来るだけの社会的素地があったからだと言うことが出来る。

特に、他の地域に大きな影響を与えたジャワを隣接地として持ったバリ（島）にとって、その存在を絶えず意識しないではいられなかったのである。従って、バリ（島）において、ジャワの影響は常に大きく受けることになるわけであるが、ことヒンドゥー（バラモン）教のこと一事をもってしても、これが、直接インドから移入されたにしても、また、ジャワを経由して来たにしても、その受容の仕方は、バリ（島）独自のものがあったと言えるだろう。

そして、それは、「バリ・ヒンドゥー（バラモン）」という言葉に象徴されていると言える。

（続く）

## 注

- (1) 京大東洋史辞典編纂会『新編 東洋史辞典』 東京創元社 昭58 705頁
- (2) より正確には「バリ・ヒンドゥー」と言われており、土着の文化と結びつき、独特の在り方を示している。
- (3) 和田久徳「東南アジア諸国国家の成立」『岩波講座 世界歴史 3 古代 3』 岩波書店 1970 462頁
- (4) 和田 前掲論文 462頁
- (5) 『東洋史辞典』 386頁
- (6) Harrison, B. 'South-East Asia A Short History' MACMILLAN&Co Ltd, London, 1964. 竹村正子訳『東南アジア史』 みすず書房 昭42 15～16頁
- (7) 小林良正『東南アジア社会の一類型—インドネシア社会構成史—』 日本評論社 昭24 7頁 10頁
- (8) 小林 前掲書 10～11頁
- (9) ハリスン 前掲訳書 16頁
- (10) 小林 前掲書 13～14頁
- (11) 和田 前掲論文 462頁
- (12) 小林 前掲書 13～14頁
- (13) 小林 前掲書 14頁
- (14) 和田 前掲論文 461頁  
 また、同氏は「インドの彫像や文字などは、初めにインド貿易商人や宗教伝導者などによってもたらされたのであろう。しかし、インド文化の諸要素を組織的・積極的に採り入れたのは、東南アジアの土着君主であった」(同上論文)とも記している。 461頁
- (15) 和田 前掲論文 462頁
- (16) 小林 前掲書 15頁
- (17) 小林 前掲書 15頁
- (18) 小林 前掲書 15頁
- (19) ハリスン 前掲訳書 17～18頁  
 和田氏も同様のことを述べている。前掲論文 461頁
- (20) 小林 前掲書 15頁
- (21) 小林 前掲書 15頁
- (22) 和田 前掲論文 462頁
- (23) 和田 前掲論文 462頁
- (24) 和田 前掲論文 463～464頁
- (25) 和田 前掲論文 465頁
- (26) 小林 前掲書 18～21頁
- (27) 和田 前掲論文 469頁
- (28) 『東洋史辞典』 541頁
- (29) ハリスン前掲訳書 48頁
- (30) 『東洋史辞典』 401頁
- (31) 小林 前掲論文 29頁
- (32) Covarrubias, B. 'Island of Bali' New York 1936. 関本紀美子訳『バリ島』 平凡社 1995 223頁
- (33) 小林 前掲書 24頁

- (34) 『東洋史辞典』 801頁
- (35) 1527年頃、同王国はイスラム教徒の手中におちた。Reid, A 'South East Asia In The Age of Commerce 1450-1680 Volume two: Expansion and Crisis' Yale University Press 1993. 平野秀秋・田中優子訳『大航海時代の東南アジア II 拡張と危機』法政大学出版局 2002 178頁
- (36) 貿易を通じ、インドネシアの海岸地帯、南ベトナムの各地、イリアン・ジャヤにマジャパイト王国は影響を与えていたと言う。Koentjaraningrat (ed) 'Manusia dan Kebudayaan di Indonesia' Djambatan 1971 加藤剛・土屋健治・白石隆訳『インドネシアの諸民族と文化』めこん社 1985 39頁
- (37) 『東洋史辞典』 705頁
- (38) 吉田禎吾(監) 河野亮仙・中村潔(編)『神々の島バリ=バリ=ヒンドゥーの儀礼と芸能』春秋社 1995 18頁
- (39) 吉田(監) 前掲書 18頁
- (40) コバルビアス 前掲訳書 204頁
- (41) コバルビアス 前掲訳書 68頁
- (42) 吉田(監) 前掲書 18頁
- (43) 吉田(監) 前掲書 18頁
- (44) コバルビアス 前掲訳書 68頁
- (45) コバルビアス 前掲訳書 68・69頁
- (46) コバルビアス 前掲訳書 69頁
- (47) コバルビアス 前掲訳書 69頁

Research Note

## The Social Climate and Linage in Bali (Ⅲ)

Sohei MORI

Masamichi MATUBARA

Until last time, We researched twice about Oka Siragnadha family in Kerambtan, Tabanan, Bali.

This time, we will change the point of view to write the essay.

We will try to Write the essey about the relation between Bali and other area of Indonesia.

Espessially, Jawa and Sumatra have special Situation in their history with Bali. Bali used to be influenced many kinds of the Situation by Jawa and Sumatra in its history.

This time, We will try to research about the introduction of Hinduism (Brahmism) and Buddhism to Indonesia area.

Because, Balis is the regeon of Hinduism now.

When we reseach the area of Indonesia with historical point of view, we find two big trends.

One of them is the era of Hinduism (Brahminism) and Buddhism,another is the time of Islamism.

So, this time we will try to write the era of Hinduism and Buddhism.